

検査、収かく調整、種子検査、袋詰、封印からラベル付に至る全工程を監督し、またその品種が遺伝的特性を十分發揮しているかどうか調査するための事後検定を実施する義務と責任を持たなければなりません。日本では実施機関として農林省、その実務機関として長野種育牧場がその任に当っていますが、我が国のO E C D 登録品種の原々種、原種生産は、農林省の指示のもとに全国の種育牧場で実施されています。この原種は現在白ラベルがつけられ増殖用種子として海外に送られ、海外でO E C D 保証種子として増殖され日本に入っているわけです。O E C D 登録品種は前述の通り各国の実施機関で厳重なテストを繰返し、明らかに他と区別され、しかも優れた特性をもち、価値あるものとして公的に認められたものでなければならず、O E C D 登録品種は国際的にも認められた極めて価値ある品種です。現在、国の育成ならびに雪印種苗育成O E C D 登録品種を含め、飼料作物種子では参加国25ヶ国で約94種類、1,350品種が登録されており、毎年登録品種のリストが印刷され公表されています。またこの制度は、同じ国際的機構であるF I S（国際種子貿易連盟）や、I S T A（国際種子検査協会）その他諸国際機関と密接な協力関係にあります。

国内における種子証明制度

畜産先進国の欧米諸国では早くから優良種子の普及奨励が叫ばれ、種子証明制度が確立されておりますが、わが国も畜産の進展に併行して飼料作物種子の需要量増大が予測される中で、種子の品質向上と優良品種の普及を図ることの必要性が高まり、昭和43年12月に社団法人日本飼料作物種子協会が発足し、以来種子の品質証明、種子現品検査、圃場審査などの各規定に基づき、輸入種子、国内流通種子の品質証明のための検査を実施し、合格基準以上の高品質種子について証明書が交付され、優良品種の普及推進に大きく貢献しております。昭和48年度では、流通種子受検数量は4,845t また、昭和49年度では、春まき用だけでも5,431tに達し、年々その事業が増大していることは極めて嬉しい傾向といえましょう。

庭木の冬囲いと 苗木の越年

輝風園 須 田 輝

庭の行事には流行があるわけではなく、したがって技術や方法はほとんど毎年同じ繰返しです。

あちこちで冬囲いされた庭木を見るにつけ、その苦労の跡がうかがわれます。その中には、もう少し要領よく、急所をおさえたやり方を知つていれば、毎年の冬囲いはもっと楽に、しかもきれいに出来るはず、と思われる例が少なくありません。それに、冬囲いされた庭木の姿も、殺風景な雪景色の中での、ローカル色ある素朴な風物の一つ。わざとらしくない程度の美観も考えたいものです。

冬囲いの際、誰しもがとまどるのは、小さな苗木のあつかいです。

放つておくのも痛々しいが、ちょっと前に囲うほどでもない、ということで、案外放任されがち。

きびしい冬を越した苗木の中には、折れたり、枯れたり夏頃になってやっと芽を出すこともしばしばです。どんな対策を行なえばいいか、私の知り得る方法を、ごく大づかみに紹介してみましょう。

冬囲い

庭木の冬囲いの主目的は、枝折れ防止と防寒。方法は木の種類や大きさ、その植えてある場所、地方などによって違ってきます。

灌木類

まず2m以内位の灌木類のあつかいについて。ライラック、ニキヤナギ、レンギョウ、ニシキギ、ボケ、ヤマブキ、エニシダなどは、寒さにも比較的強いので、株の中心に根曲り竹を1

本立て、下から繩でラセン状に巻き上げるだけでも十分です。ツツジやシャクナゲ類、アオキ、アセボ、ボタン、アジサイなどはもう少していねいに。

広がった株のままではいじりにくいので、まず株の中間より少し上で一ヶ処束ねるのが、仕事をしやすくするコツです。

次に株の周りに根曲り竹、もしくは細い丸太を3~6本、10cm位地面にさし込んで立てます。竹の上は右廻り、または左廻りに揃えて束ね、繩で2~3度巻いて、縦にも割りを入れます。(第1図参照)

こうしてできた囲いの外側を、下の方から繩でラセン状に巻き上げます。本州産のツツジやシャクナゲ、それにボタン、アジサイ、バラなどはこの囲いの上からさらにムシロをかけます。繩がけは上、中、下と三段階位でしばり、二度巻きにすれば、よくします。

寒風や雪から芽を保護する意味のムシロも、厚すぎたり、はずす時期がおくれたりすると、中がむれた状態になり、芽がくさったりします。これは春先の雪どけによる水蒸気や雨によって、植物

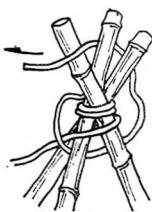
がたえずしめた状態にある時に、気温が高くなるのが原因のようです。暖い地方では雪どけと同時に、ムシロだけは先にはずしたいものです。

なお、きれいな冬囲いをするコツは、なるべくムシロのボサボサを内側に折り込むか、鋏で切りとることでしょう。

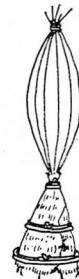
道路のそば、軒下などの庭木は、何によらず竹の本数をふやし、ムシロがけをするのが安全です。池などに張り出した木も、倒れやすいのでひととおりの囲いののち、つっかい棒をするか、近くの太い木から繩で吊るようにします。

また、ヤマツツジなどで枝が硬いうえに葉張りすぎているものは、無理にひとまとめにせず、二つ三つに分けて、それぞれ一個体とすれば楽です。逆にキンロウバイ、シンパクなどの小物が寄せ植えされてるばあい、それらを一つの囲いの中に入れてもいいわけです。植物が小さいために、竹の上部が長く余っている場合は、もう一度竹のてっぺんで束ねると、きれいな上部空間ができます。(第2図参照)

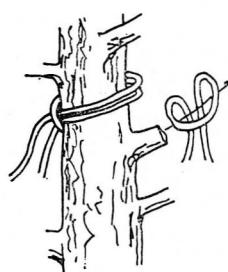
ニキヤナギ、ニシキギなどの一本立ての支柱があちこちにハネているのは見苦しいもの。近いも



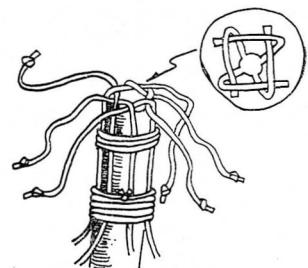
第1図 たて割り



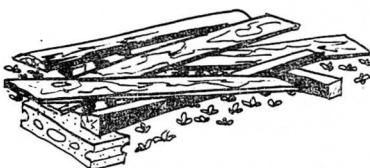
第2図 二段しばり



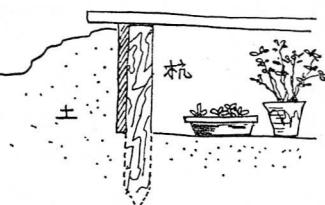
第3図 ひばり結び



第4図 いしだたみ



第5図 板きれ囲い



第6図 フレーム作り



第7図 ねかせる

の同士、上をしばると、丈夫になるだけでなく、見た目にも落着きます。

△喬木類

特に保護の必要なのは、喬木の中でも主として針葉樹です。あまり枝すかしをしてない樹はななおさらで、アカマツ、クロマツ、ゴヨウマツ、オノコなどでは、下枝が老化して硬くなっている、ベタ雪の時などに折れやすいようです。

対策としては、幹の上から繩を垂らして下枝を吊る「幹吊り」があります。第3図のようにひばり結びとし、枝を少しばかり手応えのある程度、上に引きあげるのです。

幹吊りの出来ないようなキノコ型の樹、もしくはキノコ型に限らず、冬化粧の意味では「雪吊り」を行ないます。幹吊り用の丸太はふつう樹高の1.5倍位がいいのですが、短い丸太を使う時は幹にしばりつけて宙吊りとします。

丸太の頂上には下枝より長くした繩を、8~20本位しばりつけます。丸太の先の繩は70cm位あまらせ、第4図のようにいしたみに編みます。いしたみは右廻りと左廻りに編み、余った繩の先は長さを切り揃え、一度結んでダンゴを作れば、ほつれません。この丸太は真っすぐに立てて、幹にしばりつけます。美しい雪吊りをするポイントは、繩を平均に分配し、円錐形の、繩で囲まれた空間を作ることにあります。

以上のほか、庭園工作物の保護も忘れてはなりません。とうろうで足の不安定なものは分解して地面に並べ、ムシロをかけておきます。袖垣も、すすけたり傷んだりしがちなので、ゴザかムシロ、あるいはビニールでおおいます。

池で魚を越冬させる場合は、水を一ぱいに張り、丸太や板をかけ渡し、ビニールかムシロをかけておきます。魚を入れない場合は、水を抜きます。

苗木の越年

実生や挿木でふやしたばかりの苗木はなおさらのこと、2~3年生の苗木にとっても、約半年の冬はきびしいものです。ほんの少しの手間でも、手だけを加えるのと加えないのとでは大違い。毎年の園芸を、より楽しくする為に、次のような方法を心がけてはいかがでしょう。

▽2~3年生の苗

マツ類、オノコ、ツツジ類などで少量のばあいは鉢、または木箱に入れて、室内にしまい込むのも一つの方法。マイナス2~2度になる部屋で、しかも日の当らない処でも案外もつものです。ただし室内のことゆえ、乾燥や気温の変化に対して十分注意します。

また、基礎コンクリートの高い家では、床下にしまい込むといいでしょう。ムロと同様、床に入口をつけるか、コンクリートの一ヶ所に穴をあけ、くぐり戸をつけます。

暖房のいきどいた居間などに置く場合は、単に列植して成育の過程を見るのもいいでしょう。いくらかでも観賞できるように、手を加えたら、冬の室内園芸はより楽しくなります。つまり、盆栽的に寄せ植えしたり、盆景的に立や流れを作って苗木をあしらうなど。

寒い部屋と違って、植物はよく成長するのですが、室内のことゆえ、モヤシのようにか弱い伸び方をします。こうした植物は春からは十分太陽に当てましょう。戸外でそのまま越年させる時は、第5図のようにところどころに台をし、角材や板きれをかぶせるのも、案外効果の高いものです。

しばれ方のきびしい地方では、こんな方法ではききめがありません。安全策としては、地下30~40cm掘下げ、フレーム(温床)を作ります。土かべがくずれないよう、穴の内側のところどころに抗を打ち、土かべと抗の間に板をはさめば枠の仕上がり。(第6図参照)掘上げた土は、外枠の囲りに寄せ、スコップの裏でたたいて固めます。

この中に鉢や箱植えのものはそのまま入れ、地植えしてあったものは、床に寝かせて並べ、根に土をかけるのです。この上からは、角材や板を並べ、ビニールなどをかけなければ十分です。

▽大きな苗木

30cmあるいは1m位の苗木は枝折れが心配です。本数の少ないばあいは、ウメでもモジジでも支柱を1本立て、1~2箇所ゆわえつけます。苗が大量にある時は、掘り起してから浅く溝を掘り、一例に並べて寝かせます。根には土をかけて軽くふみつけるだけで十分。(第7図参照)バラの越年もよくこの方法がとられます。